〔後見草中〕寶暦九年の夏の頃より、誰仕出せしといふ事もなく、來る年は十年の辰年也、三河萬歳の謠へる未錄勒○綱十年辰年に當れり、此年は災難多かるべし、此難を遁れんには、正月の壽を祝ふにあく事なしと申觸たり、依之あるひは雜煮を祝ひ、蓬萊を飾り、都鄙一統の事とはなしぬ、

〔後見草下〕又同じ比五年○安永の事なりき、御府内の人々、五六月の間より正月の壽をなし、豆をはやし雜煮をいはふ事、寶暦九年の如くせり、命あればかゝるうつけしびが事を再び見侍りしと、友どち語り笑ひしなり、

〔梅園日記五〕流行正月　文化十一年夏のころ、某の國某の山にて、猿(サル)人の如くものいひけるやうは、ことし疫病にて人多く死ぬるなり、ことしは過て來年の正月になりぬるさまに門松たて雜煮餅くひなどせば、病をまぬかるべしといへりとて、かの說の如くになしたる人もいと多かりけり、これ亦前にも有しことなり、○中略又伊勢安齋翁の洗革記云、安永七年五月晦日、江戸にて大晦日と稱して、節分の如く鬼やらひの豆をうち、厄拂の乞食いで、六月朔日を元日と稱して門松をたて、雜煮を食し、屠蘇酒をのみ、鏡餅を設祝ふ、町家にては商をやめ、戸を立よせ、簾をかけ、買人來れば、雜煮を出し酒をすゝむ、寶舟の畫を賣者も出たり、江戸中かくの如くしたるにはあらざれども、此事をなす者多し、もと若狹國よりはやり出て、諸國につたへけるとぞ、彼國の土民、山中にて異人に逢しが、かくの如くすれば疫病を除くと敎へし故に、行ひはじめたりといふ、○中略是を流行正月といふ、冬の日といふ誹諧集に、つるべに粟を洗ふ日の暮といふ句に、はやり來て撫子かざる正月、にと付たり、冬日注解に、前句のさまを女の業也と見たれば、撫子は子といふ語緣にして、疱瘡か麻疹のまじなひに、正月を仕直して祝ふなるべし、時ならず正月のはやるといふ事、都鄙ともに有こと也、昔も四月朔日親椀をもて、豆打して、年を取直せば、疫難を除く也とて、正月のはやりし事ありけるとぞとあり、また叢桂偶記に、凡世俗遇疫邪災疾凶荒之歳、則不問何月